インタビュー　二〇〇八年四月十七日（木）

# 講談師・神田香織さんに聞く

司会／九里廣志（九里学園高校校長　教育研究所副所長）
佐藤淳二（護憲ネット21事務局長）
上村英俊（九里学園教育研究所主任）

**司会**　今回、こうやって『護憲ネット21米沢』で神田さんをお招きしたいと思ったねらいはどのようなものだったのですか？会のことも含めて教えていただけますか？

**佐藤**　私たちの会は、正式には『平和憲法を広める会・護憲ネット21米沢』といいます。現在会員数は百二十名ほどです。戦争の惨禍を体験した戦後日本で創られた平和憲法を護り、今に生かすことを目的とした人たちで作っている会です。二〇〇〇年五月からのスタートです。特に憲法の平和条項すなわち九条を護ることについて、いろんな立場の人々が結集しています。二〇〇四年に全国的な組織として『九条の会』が作られましたが、それよりも以前から同様な活動をしています。年に一～二回の学習会を開いて平和憲法の大切さを確認しています。

　戦後六十年以上も経って、だんだん戦争を体験した先輩たちは亡くなっていき、戦争の記憶は風化してきている現状です。最近は九条を変えて、アメリカの戦争に加わろうともしています。戦争の当事国の戦闘員はもちろんですが、多くの非戦闘員たちがあの戦争で、特に空襲や原爆で亡くなっています。そこで今回は、広島・長崎の原爆被害の惨状といいますか、その悲惨な現実というものを少しでも



知ってもらって、戦争を決して起こしてはならないということを、是非とも広めていきたいという気持ちからこの公演に取り組んだのです。かねてから、神田香織さんイコール『はだしのゲン』というイメージがあったものですから、それで今回は彼女をお呼びして、原爆について少しでも皆さんに考えてもらいたいと企画しました。

## 「はだしのゲン」を演じることになったきっかけは？

**司会**　神田さんは、「講談」という形で、あの中沢啓二さんの漫画で有名な『はだしのゲン』を演じておられているわけだけれども、講談というのは、自分でストーリーを作ってというのが一般的なのですか。

**神田**　そうですね。新作、古典新作、いろいろありますけどもね。古典というのは昔から伝わっている武芸物ですとか、お家騒動とか、徳川家康とか上杉鷹山の話などもそうですけど、こういう立派な人がいた、こういう活躍をしたっていうものですね。それ＋αで、その時代その時代のその講談師が、これを世間に訴えたいというテーマを自分でまとめて演出して、「さあ、どうですか。聞いてください！」っていう風にやってきた歴史があるんですね。その中から、将来的には古典になって残っていくというものもあるわけです。

　私は、昨日も講談の前にお話したように、この世界に入った頃は、この『はだしのゲン』とか、戦争のことを喋ろうとは思っていなかったんです。でも、修行が終わってからサイパンに行って戦跡を見て、その後も沖縄へ行ったり、いろいろ戦争を取材してみて、この『戦争』のテーマは是非とも語っていかなければならないと思うようになったのです。同時に、テーマがあまりにも大きくて、重いものですから、ちょっと私では手が出ないかもしれないっていう気持ちもあったんですね。でも、マンガ『はだしのゲン』を見つけた時に、これだったら私が元気にたくましく演じられるかなと思ったんです。戦争の話って悲惨ですので、どうしても悲しくって暗くなっちゃうんですよね。そういう部分ももちろんありますけど、でもこれなら最後には、「よし、平和のために頑張ろう！命は大切なんだなあ」って思ったり、「自分も平和のために一生懸命頑張っていこう！」って、見てくれる人が思ってもらえる作品になると思って取り掛かったんです。そしてもう二十二年になるんですよ。

**司会**　そんなに以前からやっていらっしゃるんですか。

**神田**　そうです。これが私の代表作の一つとなりました。もう一つ、『チェルノブイリの祈り』という作品を四年前

から演じています。これも昨日聴いていただいたように照明と音響を入れた講談です。チェルノブイリの事故の時に消防活動に出かけていく消防士と、その家族のお話なんです。消防士は被爆後、わずか二週間で亡くなっちゃったんですね。奥さんは彼が大好きなもんですから、そして結婚したばっかりなもんですから、片時も離れたくないと思って、彼に無理やり付き添って看病したんですね。その時お腹に赤ちゃんがいたんですが、自分にはもうすでに子供がいるって嘘ついてね。夫を看病してから六ヶ月経って生まれた赤ちゃんは、誕生後四時間で肝硬変で亡くなっちゃうんですよね。その事故から十年後にインタビューしたお話を基に本になったのを、私は講談にしたわけなんです。彼女はお腹の赤ちゃんによって救われたんですよね。普通に暮らしている、愛し合っている、普通の新婚の夫婦が、そういう事故でとてつもない目にあっていく。これは、チェルノブイリだけじゃなくて、日本にも、世界中どこでも起こり得ることだと思います。だから、私は、講談っていう手法では、いろんなお話が作られていくと思うんですが、今のマスコミですとか、いろんなところで大々的に言わないで、ほとんど隠しているような事実ですか、そういうところを、「実際にこういうことがあったんです。さあ、皆さん考えましょう!!」という感じで発表していけたらいいなぁ、と思っているんですよね。

**司会**　今の話だと、結局、その一番のきっかけは、まず、サイパンに行ってのショックだったのですか？

**神田**　そうですね。大変でしたよね、あのサイパンでの戦いは。本当にショックでした。

**司会**　実は、この米沢出身の人が、サイパン玉砕の時の総指揮を執った人なんですよ。その人は、最初はハワイの真珠湾攻撃の機動部隊の司令長官の南雲忠一という人なんですけどね。その後南方に転戦して、ミッドウェイ海戦では大敗を喫して、結局最後はサイパンの陸の上で、司令官としてバンザイ突撃を命じ、自らは自決して亡くなられた方なんですよ。

　ところで、そういう戦争ものを講談にかける人っていうのは、他にもいらっしゃるんですか？

**神田**　いらっしゃることはいらっしゃるんです。例えば、『火垂るの墓』っていう野坂さんの話を講談にしてやっている人もいますし、結構いますね。ただ、舞台作品で、ああいう風に照明とか音響とか使ってホールでやるような、一時間もの長さがあるものは、やっている方は余りいませんね。でも三十分とかそんな位のものならやっている方もいますよ。講談の寄席でね。そういうの、とても私は嬉しいですね。



## 『立体講談』ってどういうもの

**司会**　そういう方はどんなふうに寄席でやってらっしゃるんですか？

**神田**　そうですね。人形浄瑠璃と一緒にちょっとやってみたり、戦争テーマじゃなくて古典って言う切り口で何かとジョイントしてホールでやったりしているんですね。あと一人か二人くらいはいるみたいですね。

**司会**　神田さんの場合は「立体講談」っていってますね。この「立体」ってわざわざなさったのは何か意図が？

**神田**　そうですね。講談っていうこと自体分かりにくいですしね。ただ「立体」っていうとなんか動きを感じてもらえると思うんですね。私の師匠の神田山陽が、「立体講談」っていうのを打ち出して、それで何人かと共演したりしてたのです。高座で怪談なんかやる時に、二、三人女の子を出して、後ろのほうで幽霊をさせたりする。私もその中に入っていたりするんですけどね。芝居がかりでやったりして、わりと自由に何でも取り入れてやろうっていう師匠だったもんですから。私も芝居の出身なもんですからね。昔、劇団にいましたからね。劇団は照明、音響がもちろんあるわけですので、一つのお話をより楽しく感動的に聞いていただくためには効果的ですよね。楽しくっていうのもあります。涙を流すシーンもそうですけれども、少しでも分かりやすく、サービスって言っちゃおかしいですけれども、そういう演出を考えてみようかなぁと最初から思ったんですね。特に、『はだしのゲン』は、原爆が落ちたときのあの音がどうしても伝えたいと思ったんですよね。二十年以上もやっていますから、最初とはだいぶ音も変わってきているんです。照明もですけどね。最初は、「ドォーン」という音でした。今は、もっといい音を探してきてもらって、地鳴りが客席まで響いていくようにして、あそこでは「ワッ」とお客さんにちょっとびっくりしていただいて、「はぁ、こんなだったのかぁ…」っていう、その時代にワープしてもらうような演出をね。そういうのも諸々含めて「立体講談」っていうふうに名付けてやらせてもらっているんです。

**司会**　私も、中沢啓治さんの『はだしのゲン』の漫画は、読んだというか、見たというか。映画にもなりましたよね。目で見るものと、言葉で聴くものとでは相当違いますよね。

**神田**　違いますねぇ。

**司会**　やはり講談で語ってもらうことによって、なんか自分の中でイメージを作らなきゃならないっていうのかな。それがとっても漫画とは違って、いっそう自分にインパク

トを与えると言うのか、そういう感じがしましたね。

**神田**　そうですね。この、耳で聞いて頭で想像するっていうのは、とても面白いと私は思うのです。例えば、小学生と戦争を体験した方が同じ場所で聞いてくださると、小学生は自分の想像力の中でめいっぱい想像するんですね。で、戦争を体験している方は自分の戦争の体験を踏まえた上での想像なんですよね。ですから、百人いると百人がそれぞれ別の映像を頭の中に作り出して聞いてくださっているという、その自由さがあるんですよね。例えば、映画とかアニメーションですと、特に『はだしのゲン』の被爆した様子をアニメーションで明らかに見てしまうと、子供などは実際に怯えちゃうということがあるらしいんですね。で、「『はだしのゲン』を聞きに行こう。」ってお母さんなんかが誘ったときに、「いや、気持ち悪くて怖いから行かない！」って言ってしまう子供がいるっていうんですね。こういう講談のお話ですと、また全然違うから、「連れて来ればよかったわぁ。」なんてお母さんによく会いますね。

**司会**　神田さんのは、昨日の場合には一般の方々対象だったわけだけれども、学校なんかでやられる場合も多いんですか？

**神田**　最近ではですね、東京渋谷区の広尾の小学校でやりました。そこで二年前に昨日聞いていただいた『はだしのゲン』のお話をやったんです。小学校四年生ぐらいからしか理解できないかなぁと思って、四年生以上を対象にやったんです。そしたら今年になって、その続きを聞きたいって言うんでね。実はこの話には続きがあるんです。今度は一年生から六年生まで一緒でした。前の時に「四年生からじゃずるい！」って一年生から三年生が文句言ったって言うんですよ。「自分たちも聞きたい！」って。でも、続編の方がはっきり言って言葉が難しいんですよね。それですから、ちょっと心配したんです。でも、一年生から六年生まで一時間半、すごく集中して聞いてくれたんですよ。だから、一年生でもわかるんだなぁっていうのがよくわかりました。

一年生たちの感想は、「かわいそうだった」っていう子がいたり、「半分わかった」っていう子がいたり。実際、子供のアンケートを読むと、とても面白いんです。それは、不思議なところに反応した子がいるんですね。「僕は『ミミズのうどん』はとてもじゃないけど食べられない」っていうのがあった。『ミミズのうどん』っていう替え歌に反応した子なんですね。「今まで給食を残してきたけれども、これから絶対残しません！」って書いてたり、いろんなところに反応してくれるんですよね。そのような「引っ掛かり」っていうのが自分の中にできますと、それが中心になって、戦争について、平和について、それからいろんな公害問題とか環境についてとか、いろいろこれから考えていく上での一つの核って言うんですか、そういうのになっていくんじゃないかなと思うんですよね。

**司会**　昨日、終わって会場から出てこられる方々を見ているとね、目を赤くされていた方が相当おられたように思いますね。佐藤さんたちは主催者として、そういう意味では、今回の講演は相当な影響力があったと見られているんでしょうね。

**佐藤**　私自身、日本の古い話芸に音響などをも加えたこの『立体講談』に興味がありましたから、とても楽しみでした。影響力っていうか、昨日、私も実際見て聞いて、やっぱり生の講談を直に聞くというのはものすごい迫力があって、迫ってくるものがあったですね。特に、一瞬真っ暗闇になって、みんな集まった人たちが、一同が同じ思いにふけるというか、そういう沈黙の一瞬っていうのはすごいですね。さっき、いろんな個人としての自由な発想があるって言われましたけど。あの時は、逆にそれぞれみんなが同じ思いを寄せていたのではないかなぁって私は思ったんですけれどもね。やっぱり、一堂にみんなが集まって、思いを共有する時間を持つということが本当に大事だなぁと私は思いましたね。

**司会**　今のは舞台が暗転した状態の時のことですね。寄席の講談では、普通、ああいうことはないわけですね。

**神田**　ないですね。寄席の明かりはピカピカの明かりですので、あぁいう風に原爆を落とされて、地鳴りがしていて、真っ暗にして、あそこですぐに台詞に入っていかないで、ちょっとした時間が必要なんですね。おそらくみなさん、ここで「はぁー」って思ってくれると思うんですね。それから静かになっていって、原爆で被爆したときの情景を語っていくわけなんです。

あのお話を私が好きなのは、やっぱり、最後に赤ちゃんが生まれることですよね。大勢の人がとても悲惨な亡くなりかたをしていく中で、一筋の光明という形で赤ちゃんが生まれるのがね。ただ、あの赤ちゃんは、それからしばらくすると亡くなってしまうわけなんです。けれども、そこで命の大切さを精一杯ゲンが訴えていくところで終わることができるものですから、あれは非常にいいエンディングだなと自分でもいつも思うんですね。私も力が出てきますし。

**上村**　質問というより感想になりますけど、昨日会場でお話を伺わせていただいてもう心ぶっちゃけて帰ってまいりました。出てくる時に握手とかなさってる方を見て、握手したいなって気持ちもあったんだけど、それよりも誰とも

口きかないで、もうどこかに消えてしまいたいとね。私も少年ジャンプで『はだしのゲン』を読みました。ガラスが刺さった場面なんかは忘れていた場面なんですけど、一コマ一コマが甦ってきて、最後の方は耳をふさいで聞いていました。最初のところでだいぶいろんなお話なされて、あそこでは笑いも出たんですが、あのくらいテンション上げていかないと最後まで聴衆はついてこれないのかなって思ったんですが。

**神田**　そうです。最初に笑ってもらって、少し気を楽にしてもらわないと最後までね。最初から深刻で、最後までのままいっちゃうと、あまりにも背負って帰ってもらうものが多くなっちゃうんで、最初は気楽にちょっと笑っていただこうという風に。「あいうえお」って言葉あそびでもやってもらいながらね。

**上村**　後で家に帰ってから、最初の場面の言葉あそびは何だったんだろうなって思った時に、最初から『はだしのゲン』に入っちゃうと、もうかなり重たくなっちゃう。だからあいう構成だったんだろうなって思いました。あと、こじきの格好して怒られると思って帰ってくる子供たちを抱きしめてやる場面とか、お母さんが一緒に死にたいと言っている場面なんかは、私も妻や子供を持つ身なもんですから、すごく身につまされて…。おそらく会場の方たちはみんな同じような思いで帰られたんじゃないかなって思いました。

## 同じ原子力でも原発をテーマにして

**司会**　さっきもおっしゃったように、同じような原子力の問題を扱うチェルノブイリの話がありますが、そちらの方は果たしてそういう何か光明が見えるようなお話なんですか？

**神田**　この作家はスベトラーナ・アレクシエービッチという女性です。この人はベラルーシを追放されてしまったんですけどね。この方はその本で「私は二つの時代のことを書き記している。つまり、人類はもう踏み入れられないところに入ってしまった。でも自分は、これからの未来をどうやって生きていったらいいのかってことを書き記しているんだ」っていうメッセージを言っているんですね。それを最後に私は語るんです。それまでは、消防士の妻の独白を中心に二週間の毎日を追いかけていくわけなんです。その間は、さっきお話したように、毎日のように被爆していますので、生きる原子炉になっていますので、顔色も変わっていくし、最後には手を持ち上げると骨と体がバラバラになってしまっていて、そういう症状を語っていく。亡くなって埋葬するときも、自分たちの故郷に棺を持って帰ることが許されないんですよね。国家権力によって、「もう、あんたたちの家族じゃない！国の英雄なんだ！」っていうことでね。

そういうとても過酷な現実をまざまざと語っていくんです。その消防士の妻は、結局は赤ちゃんも亡くなって、夫も亡くなって、生きる希望もなくなってしまうんですね。ところがある時、よその赤ちゃんを見て、「私も赤ちゃんを産めば生きていけるかもしれない」と思って、ある男性と知り合って赤ちゃんを産むんですよ。ところが、やっぱり亡くなった消防士のことがすごく好きなもんですから、結局その男性も去っていくんですよね。とってもとっても辛い現実なんです。けれども、この生まれた男の子と一緒に暮らしていくわけなんですよね。

作家がその男の子に「こういう現実、怖くないか？」って言った時に、「怖い。だけど、自分はわかっている。勇気を持たなければいけないんだ！」と言ったというんですよね。作家は最後に「戦争は終わればまた人々は健康な子供を産み育てることができる。しかし、チェルノブイリの事故は、その子供たちがその不安を引きずっていかなければいけない」ってことを訴えているんですよ。私も「もし事故が起きたら日本も同じようなことになるのは間違いありません」ってことで、自分のメッセージもちょっと入れさせてもらっています。そしてエンディングになるわけなんですけれども、みんなやっぱり相当いろんなことを考えさせられるみたいですね。

高校生とか女の子の前でもやったことがあるんですけれども、やっぱり相当ショックを受けるっていうのがわかりました。「チェルノブイリ事故があったってことはかすかに聞いたことがある気がするけど、こんな状態だってことを何でテレビでも学校でもちゃんと教えてくれないんですか」とか、「香織さんの講談を聞いて初めてそのときの人たちの気持ちがよくわかってきて、とっても感動しました」っていう意見がありました。愛ということがテーマにしてありますので、人を好きになる、結婚を意識するような年頃の女の子たちが、「やっぱり他人事じゃないんですよね。自分も愛する人がこうなったらどうしたらいいんだろう」っていう風な、自分にひきつけて考えてくださるんです。この作品も明るいテーマではないんですけれども、ずっと語っていきたいと思っているんですね。できたら、日本に原発事故が起きないように、そう意味を込めてもっともっと語っていきたいと思っているんですよね。

また、大人の男性からの意見なんかですとね、「それだけ最愛の夫がいたのに、なんで子供を産みたいがために他

の男性と一緒になるのかなぁ」っていうふうな、「女は信じられない」なんていう意見もあるんですよ。それは違うんじゃないんですかって思いますけどね。そんなところで悩んでいる男性もいますよね。可笑しいですよ。それぞれ引っかかる場所が違うんですよね。

**原子力をテーマにする背景は**

**司会**　同じ戦争ものでも、例えば原爆のことを扱ったり、チェルノブイリの原発事故なんかを扱うのは、神田さんのご出身が福島県の平（現いわき市）だということが何か影響しているんですか？

**神田**　そうですね。それももちろん影響していますね。やっぱり一番最初に『はだしのゲン』をやって、核っていうものの恐ろしさっていうのをわかってしまったんですね。たまたま元夫の父親が武谷三男っていう原子力の専門家だったものですから、いろいろ話を聞き、取材もしました。「あぁ、これは冗談じゃないな。」と思いましたね。最初に原発が日本にできたときのお粗末な話も聞きました。湯川〔秀樹〕さんたちが「日本にぴったりの原発、地震大国日本に合うような原発を誘致するのであれば考えなきゃいけない」って言っているときに、中曽根〔康弘〕っていう人が「そんなこと言っている場合じゃない！」って言って、無理矢理アメリカ型の原発を入れてしまったが不幸のもとだっていうのも聞きました。そんな知識があった中で、昨日も言ったように、ちょうど『はだしのゲン』を講談にしようと思っていた一九八六年四月ですよね。チェルノブイリの原発事故があったのは。

うちの近所、車で小一時間のところにも原発がどんどんできていたんです。チェルノブイリの事故の時、義父に「もし双葉で事故があったらどうするの？」って言ったら、「んー」ってすごく深刻に考えて、「その日の風向きしだいだなぁ」なんて言っているんですよね。そんなのんびりした田舎に、いろいろ騙して原発は来るわけですよね。六ヶ所なんかも、この間もまた行きましたけれども、本当にひどいですよ。最初は石油コンビナートを造るって言って土地を買収したんですからね。それが原発関連に変わっていってしまうんです。

近所の福島県の浜通りでチェルノブイリのような事故が起きたならば、けっして他人事じゃないわけですよね。我が故郷の人々が、強制移住させられたり、被爆したりで。子供たちも甲状腺がんで多くが亡くなっていきますからね。冗談じゃないなって気持ちがありますよね。チェルノブイリの事故の時、私も二十幾つだったんだろうなぁ、消



防士の夫婦たちも私とほぼ同じ歳なんですよね。ちょっと場所をワープさせていわきにもってくると、これはちょっとねぇ、他人事じゃないですよと思いました。そこのところ、みなさん考えましょう！っていう風な感じがありましたよね。

**司会**　本当ですね。私もいわきに行った事があるんですが、原発のある双葉などに行ってみると、まさに原発があるための公共施設の立派さというのかな、すごい環境ができていますものね。

**神田**　人口は少ないのに町役場はものすごく大きくて、歩くの疲れるくらいなんですよ。私も選挙に出たとき、挨拶しに行きましたけど、広すぎて。体育館なんかもね。ほとんど人がいない。道路も立派で。もう用済みになったらそのまんま捨てていなくなるわけですよね。原発で食べている人ももちろんいますけれども、原発がくる前からも、もちろん他の仕事で食べていけたわけですから。やっぱり、危険で危ないものは、さっさと絶対やめていく方向にしていかないと。原発事故が起きてからじゃ遅いんですよね。

**司会**　そうですよね。戦争そのものがまず悲惨であることには変わりはないんだけれども、ただそれがどこまで続いて影響していくかというと、武器を含めて原子力の影響は他の比じゃないですよね。

**神田**　そうなんですよ。

**司会**　佐藤さんたちには、将来的に今神田さんのお話してくださったような、チェルノブイリをテーマにしたようなものもやりたいなんていう予定もあるんですか？

**佐藤**　今は戦争そのものが、それこそ壊滅的な破壊をするわけですよね。そういう戦争をして、復興支援とか人道支援っていうことはないんですよね。そういうやり方からお互いに卒業して、本当の意味で社会のため、あるいはそこで暮らしている人たちのためにがんばろうという意識にならないといけないんですよね。原子力も人類にとって生存を左右するものですから、そういう意味で是非ともまたお呼びしてみたいなと思いますね。

**生活拠点とテーマの関連は**

**司会**　神田さんは福島のこと、または福島の人をテーマにした講談も結構やってらっしゃいますよね。

**神田**　実は私は五年前にちょっと子供の学校の都合でまた東京に戻っているんです。それまで福島には出戻りっていう形で十年近くはいたんですけれどもね。その間に地元の講談を結構掘り起こしましたね。いわきは特に文化不毛の地と言われておりましてね。米沢とはまったく逆ですね。

歴史的人物も本当はいっぱいいるんですけれども、掘り起こさないんですよね。そこでちょっと、幕末の老中をやっていた安藤対馬守（※磐城平藩五代藩主・信正。井伊直弼の死後、公武合体を実現したが、尊王攘夷派の水戸藩士に坂下門外で襲われたことは有名）をちょっと掘り起こして、地元の商工会の人たちと一緒に発表したりしました。それから、安寿と厨子王の話も元々はいわきにあったんです。それも講談にしたり。それから、立派な人物では、喜多方の瓜生岩子。あの人は立派過ぎて…、真面目に語るんです。結構福島関連の講談は作らせてもらっています。野口英世はちょっと面白いずっこけたところをね、若い頃お金使いが荒かったりするところは笑いが取れるのでね。そういうところを入れたものもやって、立派立派じゃあね。人間臭く演出して。それが福島関係の講談ですかね。

## 「演劇」と「講談」

**司会**　「演劇」と「講談」とで似ているところや違うところは何ですか？

**神田**　そうですね。本当は非常に似ているんですよね。ただ、演劇は何人かで出ているんですよ。だから、自分の台詞が終わったら次の俳優さんに渡せばいいんですけど、講談は渡せないんですよね。一人で、それこそ何役もやるわけですし。演劇の場合は舞台に大勢出てると、みんなそっちを見ているからちょっと後ろを向いてリラックスしようとか、そういう息抜きもできるんですがね。講談は一人しか出ていませんから、隠れて息抜きはできないですよね。全部見られているっていうのが講談です。

**司会**　演劇の中でいう、いわゆる一人芝居の部類なんでしょうね。

**神田**　似ていますね。同じですよ。それに講談は動きっていうのが制限されているんですよね。机からはみ出さないわけですからね。演出で立ち上がるときはありますけれども、基本的にこの制約の中で、上半身で語るのが講談で、演劇は全身ですんでね。相当制約はあるんですが、その制約の中でできる自由もあるんですからね。なんといっても、一人で全部責任を取るっていうのがおもしろいんですよ。最初の頃は、なかなかうまくいかないと、「まったく、困ったなぁ。私はなんてドジなんだろう」とか年中思うわけですけれども、上手くいったりすると、「私って偉いんだわ」とか「私ってすごいんだわ」とか、はっきり評価がわかるんですよね。だから、こう落ち込んだり、調子に乗ったり、この繰り返しで今までできているかなっていうふうに思いますね。



**司会**　昨日、グループホームの『結いのき』の方に行って、お年寄りたちに話をされたわけですけれども、ホールの観客の時とは違った雰囲気だったのかなっていう気がするんだけれども、どうでしたか？

**神田**　昨日はですね、お年寄りの方ですから、まずゆっくり話そうということと、にこやかに話すっていうのは意識しましたね。ちょっと、認知症の方もいらっしゃると聞いたので、とにかく訴えかけるように「そうですよねぇ」っていう風に、丁寧にお話していった方が良いかなと思いまして、そういう風に演出してやってみたんですけれど。ですから、しゃべると「うん」と皆さんが頷いてくれるんですよね。それで反応を確かめながら。で、ここでこう笑うというシーンが三つ四つあるんですが、そこでは職員の人が笑ってくれたり。それから、声をあげるおばあさんが一人いらっしゃって、その方が興奮すると、すごい声をあげてくれて、あっ、これはうけているんだなとわかって楽しかったですよ。すぐ目の前にいたお年寄りが最後に花束をくださったんですが、後で聞いたらその人はそんなに喋れる人じゃなくて、どっちかって言うとあんまり協調性のない人だったらしいんですけど、ものすごく立派な挨拶をしてくださったんですよ。「今日は私たちのためにわざわざありがとうございます。私たちにとって、とてもいい思い出になりました。これからも頑張ってください」ってね。その時とっても感じたのはこの町の誇りの高さですね。米沢に生まれ育ったった方なんだと思うんですけど、武士の誇りみたいなものを感じたんですね。あれは本当に感動的でしたね。職員の人たちがびっくりしていましたからね。リハーサルもしてないし、最初しりごみしていたって言うんですけど、一番前に座ってちゃんと話を聞いて、あんな立派な挨拶できてって。楽しかったです。

## これからの活動の方向性

**司会**　こんな題材をなんて思ってらっしゃることが、他に何かありますか？

**神田**　今は地元のフラガールを講談にしてやっているんで

す。いわき弁で堂々とできるものですから、最初は訛りを直そうと思って入った講談で、今は訛りまくっているという状態です。あの映画の題材を地元でやっているんですけれども、やっぱりみなさん笑って泣いて喜んでくださってね。

それから去年は、人種差別、黒人差別をうけながらも、その中で実力を発揮していったビリー・ホリディという歌手の人生も講談でやりました。途中で私はジャズを歌わせてもらってね。本当はジャズが歌いたくて、何かお話を作ろうって頑張ったわけですけれどもね。面白かったのは、ジャズが発生したニューオリンズというのは田舎町ですので、「田舎って言ったらいわき弁」っていうことで、いわき弁でやったんですよ。やっぱりそれも喜んでもらえました。だから今まで恥ずかしいと思っていた、欠点だと思っていた故郷のいわき弁が人々に感動を与えることができるのだということがよく分かったものです。これからもローカル色を出しながら、いろいろやっていきたいと思っているんです。

今なんとなく力が入って、声もかかって公演が多いのは、「防災講談」っていうくくりの中でやっているものですね。地震、津波、地滑りとかをテーマにしたお話です。これはたまたま去年、防災関係を一生懸命やっている団体の人たちと知り合って、最初は頼まれるような形で取材してやったんですけどね。例えば、新潟の松之山は地滑りのひどい所なんですけれども、そこに昔、自ら人柱となって村を守ったっていう人の伝説があってやったんです。これをどういう風に脚色するかっていうのですけど、自ら人柱となってっていうのは立派過ぎますよね。ですから、その時の主人公が「人柱になったって、この地滑りは直るとは限らない。だけど、地滑りの中でバラバラになっている村人の気持ちを一つにするにはこれしかない」って言って、わざと自分がくじに当たるように仕組んでいくってしたんですね。これで訴えたかったのは、もちろん災害もそうですけれども、いざという時にリーダーっていうのはどういう態度をとるべきかっていうことです。私は日本のトップを意識しながらそういうことをちょっと語って、聞いてくれる人もその辺は意識して分かってくれるんですよね。

それから連帯ですよね。つながりあっていくことがいかに大切か。今、日本は分断分断、バラバラにして、それぞれ孤独と向き合って、自暴自棄にならざるを得ないような世の中になっているけど、本当に大切なのは、さっき佐藤さんもおっしゃったように、みんなで横につながって生き、かつ何かを見て同じ思いを共有していくこと。それが、これからのこの殺伐とした世の中を生きていくときの一番の大切なつながりになっていくんじゃないかと思いますよ



ね。個人の確立ももちろん大切ですけれども、それよりも今はこのつながっていくっていうのがものすごく必要なんじゃないかなって思うんですよ。

もう一つの防災講談は『稲むらの火』っていうお話なんです。和歌山で、戦前、戦中の小学校の国語教科書に載っていたお話なんですけれどもね。これも百年から百五十年に一度、必ず大地震と大津波が来る和歌山の広川町っていう町の話です。そこではこの津波の危険性を語り継いでいかなければならない。だけど、百五十年も生きている人は誰もいないので、そのうち途切れてしまう。村の醤油屋さんが、「自分は醤油作るだけの仕事じゃない。村人に津波の危険性を教えていくことが大切な仕事なんだ！」と思いを受け継いでいって、いざ津波が来た時に、見事にみなさんを助けていくという話です。危機管理能力を伝承していくっていうんですか、そういうお話もやりました。この話はけっこう今評判なもので、国交省からもけっこう依頼が来てね。私はこの防災講談の一番のお話は『チェルノブイリの祈り』だと思っていますけれどもね。

**作品作りのおもしろさ**

**司会**　台本作りから演出まで全てをなさるわけだから、そういう意味での取材はそうとう大変なんでしょうね。

**神田**　大変ですね。ただ、今便利なのは、インターネットでいろんなことを調べられるもんですから。そういう資料をもとにして作ります。でも、サイパンに行ったことで私は戦争と出会った。チェルノブイリは、講談ができた後ですけれども、自分の目で見ることによって、さらに実感ができたっていうのがあるのです。資料はもちろんインターネットとかいろいろな本で調べますけれども、やっぱり現場に行きたいんですよね。現場の空気を感じたいんですよね。だから米沢にこうやって来ていると、米沢の空気も感じていきたいと思っているんですよ。

**司会**　今日はこれからどこをまわられるかだけれども、本当にいろいろなところを見ていっていただきたいですね。

**上村**　すごくレベルの低い質問なんですけど、落語などは一つの話を師匠が弟子に受け継ぐような形でずっと残ってくるようなもんだなってずっとイメージしていたんです。講談でもそういうことはあるんでしょうか？

**神田**　そうですね。落語と違って古典だけでやっていくっていうのはなかなか厳しいですよね。ですから、みなさんそれぞれ新作を作って頑張るんですよね。例えば、今年だったら「篤姫」なんか早速作っている人もいますし、「直江兼続」はもう何人もの方が持ちネタにして、「来年はこれ

でいろいろ知り合いのとこに行って仕事しよう…」なんて考えてらっしゃる。その時には、自分で作るわけですよね。難しい専門的な知識はそんなにいらない。やっぱり笑いをどこに入れるか。ちょっと笑いを入れてリラックスしてもらいながら。普通の講談はだいたい三十分くらいにまとめるわけです。

**上村**　落語でよく「つかみ」なんていう言葉が出ますが、神田さんも会場の雰囲気を見て、どこまでこれで引っ張るかなんていうのを考えながらなさっているんですか？

**神田**　そうですね。最初に私に親しんでもらわないと、なかなか交流ができませんから、最初にリラックスしてもらおうとしますね。あそこはもっと時間があればもっと膨らますこともできますしね。普通、公演で一時間半くらいの中で一時間くらい四方山話をして、最後の三十分で古典を一席やるんです。商工会議所とか婦人の団体とか、そういうところに講演という形で呼んでもらう。喋りの方の講演ですね。昨日のは「公」の公演なんですけどね。やはり講談っていう話芸ですからね。

私は最初は人前で喋るのは本当に嫌いだったんです。けれども、やってくるうちにいろんなことを勉強せざるを得ないんですよね。勉強せざるを得なくなると、最初は受け身だった勉強も自分からやるようになるんですよね。学校の時の勉強との差っていうのがここで出ますよね。卑弥呼なんて覚えたって将来役に立つのかなって思ったり、鎌倉幕府の滅亡・イチミサンザンなんて、こんなことを試験のために一生懸命覚えていくわけですけれども、講談をやり始めてからは、とにかく積極的に自分が出ていって勉強しないと身につかないものですから、性格も前向きになっていくんですよね。ちょっと図々しいくらいになってしまうんです。世の中が余りにひどいとね、「日本はこんなんじゃ駄目だ」なんて言って選挙にも出ちゃうし。自分の人生を積極的に開拓できるようになるんですよね。芸の力っていうのは怖いですね。だから世間的に、「神田香織さん？テレビにも出てないし。知らないよ」とか言われても、ちっとも気にならないんですよね。「私はこういうテーマがあるから、そのテーマに向かってやっていく自分が一番気持ちがいい」っていうふうになっていって。二十七年やってきて、つくづく芸のパワーっていうのは恐るべきものがあるなぁと思いますよね。だから今、講談教室をラジオでやり始めたいと思っているのは、このパワーを本職でやらなくてもいいですから、どこかでつかんでもらいたいと思っているからです。人前で喋るときとか、人前で喋らなくてもいいんですけれども、芸人的な生き方というんですか、そういうのをちょっと身に付けてもらえたら相当楽になるし、楽しくなるよって私は言って歩いているんですね。



## 言葉の劣等感が『講談』入門の背景

**司会**　神田さんは、方言を直したくて演劇に入られたといっておられたみたいなんですけど。

**神田**　いや、逆に演劇に入ったところ、あまりにも訛っているので、それで講談で直そうとしたんです。山陽師匠って方は教え方がとっても丁寧なんですよ。低い声、高い声を出して、訛るたびに直してくれて。でもそのうち気にならなくなるんですよね。多少訛っていたっていいじゃないかっていう風に。本当にその通りなんです。新劇っていうのは結構うるさくて、あの頃ちょっとイントネーションがおかしいと「そこ訛ってる！」って指摘するのが流行っていたんです。それで自信を失っていたときに講談に出会えて。山陽師匠のおかげですね。もう亡くなりましたけどね。その頃は、講談やるって言ったら、みんなから「頭狂ったんじゃないの？」「なんでそんなことやんの、みっともない」とか、いろいろ言われましたよ。

**司会**　一般的な印象が、男の人がやるものみたいな印象なんですね。でも昨日お聞きしたら、女の人が半分くらいいらっしゃるんですね。

**神田**　そうなんです。今やもう女の人たちがいっぱいでしてね。それぞれ自分のやりたいネタを作って。もちろん、最初は古典の勉強をするんですよ。基礎を作るためですからね。でも、二ツ目くらいからは新作でね。例えば、美空ひばりの物語を作ったり、いろいろトライしていますよね。

**司会**　私の知っている方で、熊沢南水さんっていう方がおられて。この方はね小説を語るんですね。例えば樋口一葉の『たけくらべ』を最初から最後まで朗じる。その方も青森の出身なんだけれども、やっぱり青森弁が東京に行ったら恥ずかしくて、それを直したくてそういう世界に入ったとおっしゃるんです。ある意味では、方言って言うのは自分を変えようとする原動力になってくれているのかもしれないですね。

**神田**　方言はいいですよね。今はテレビを年中聞いていますから、子供や若い人たちは訛らなくなってしまってますよね。昨日も米沢の方言を聞いて「おしょうしな」っていいなぁって思いましたよ。是非これからも「おしょうしな」と言いつづけていってほしいですよね。

**司会**　そうですね。方言の劣等感をバネにして頑張りたいですよね。神田さんもこれからも色々なテーマで頑張ってください。本当に長時間ありがとうございました。

**神田**　ありがとうございました。

※その後、『護憲ネット21米沢』では十二月十二日に、作家で『週刊金曜日』の編集委員をなさっている雨宮処凛『私たちに人権はあるのか　雨宮処凛トークライブ―この国で「普通の生きる」ことの難しさ―』と言う学習会を開催しました。この時期は、アメリカ金融不況からの影響が、国内産業に大きな打撃を与え、企業の「派遣切り」や「ネットカフェ難民」が大きな問題となってきた時期でした。そのような背景もあって、若い人たちをも含めて多くの参加者が集まり、会場からあふれるような盛況でした。

雨宮さんは、生活も職も心も不安定にさらされる人々（プレカリアート）の問題に取り組み、「反貧困ネットワーク」の副代表などをも勤められて、ワーキングプアの解消に取り組んでおられます。今回は、米沢市議の我妻徳雄さんをコーディネーターに、おきたまユニオン委員長の福田政一さんと一緒にパネルディスカッションを行ってくださいました。雨宮さんの取材された現状報告などに、聴衆は驚きと共感を持って聞き入り、熱心な学習会になりました。

# 米沢藩の窯業、成島焼のはじまり

山形大学大学院　修士二年　高　橋　拓

## 一、はじめに

成島焼とは、江戸後期、米沢市の成島村に成立した窯業である。上杉鷹山による改革の一つ、国産奨励・自給自足政策を背景として成立したことが知られる。

資料一　山形県史資料編四新編編鶴城叢書下「背曝」

国の産物を盛にして他国より物を求めず他国へ金銭を出さず、他国へ産物を売却し、他国より金の入様にするを国を富ます第一の策と申すへし

国産奨励は右に見られるように、他国から品物を購入しないことで金銭の流出を防ぎ、逆に産業を興して他国に売却し、国を富ませる政策であり、自給自足政策は、こうした国内産業で国内消費を補うものである。

当時の米沢では、青苧・紅花・真綿・水漆・蝋・楮などの農業生産品を特産品としていたが、新興の産地の台頭などから新たな産業の開発が求められていた。上杉鷹山による新産業の開発は、奉行筆頭、竹俣当綱のもと荒地の開墾と植林による既存産業の増産・製塩・火打石・扇折・墨硯・紙漉といった諸分野にわたり、その中には窯業も含まれていた。

窯業は国産として成功した産業の一つであり、成島焼の成功の後、置賜盆地の各地に広がっていった。

## 二、成島系窯業とは

成島系窯業とは、成島焼の技術をもとに、置賜盆地に展開した窯場の一群を指す名称である。

具体的な窯名をあげると、米沢市の成島焼・花沢焼・宮園焼・同心焼・小菅焼・落合焼、南陽市の菖蒲沢焼（宮内焼）、白鷹町の瀬戸山（十王焼）、飯豊町の椿焼がある。しかし、現在も窯跡がのこるのは、成島焼窯跡・小菅焼窯跡・瀬戸山窯跡だけで、破壊された窯場、所在地が不明な窯場、存在自体が疑わしい窯場もある。

窯跡の考古学的調査から、成島系窯業では、武士・富裕階層に向けた特殊製品を少数生産しているが、生活に即した調理具や貯蔵具が生産の中心であったことがわかってい